

東京パラリンピック・オリンピックは六年後。ことしは国連障害者権利条約が批准されます。健常者の「想像力」こそが障害者の突破力を高めるのです。

昨年九月、日本中が歓喜に沸きました。ブエノスアイレスで開催された国際オリンピック委員会総会で、二〇二〇年夏季オリンピック・パラリンピックの開催都市が東京に決まった瞬間です。

東京招致の最終プレゼンテーションで、佐藤真海さん(三)のスピーチは内外の人々の胸を強く打ちました。そう、骨肉腫で右足を失った陸上競技の選手です。

持てる力の結晶

「新たな夢と笑顔を育む力。希望をもたらす力。人々を結びつける力」。病や災害に襲われ、絶望のふちに沈んだ人々にとって、大きな救いとなる「スポーツの真の力」を説いたのです。

社説

2014・1・3

このトップアスリートを支えてきた縁の下の力持ち。そのひとつは間違いなく義足でしょう。佐藤さんの義足を作り、十年以上にわたり相談に乗っている義肢装具士の白井二美男さん(五)に会いました。

根っからの職人かたぎ。白井さんはこう言います。「義肢は体に合うというだけじゃだめです。未来までサポートできるように想像力を働かせる。血が通うような義手、義足です」

障害から才能へ

この道三十年の大ベテラン。鉄道弘済会義肢装具サポートセンター(東京・南千住)で、四百人を

受け持っている。九割はスポーツ競技とは無縁の人々だそう。手や足を失い、しお

れ果てたような患者がやってくる。切実な望みに耳を傾けることから仕事は始まります。一緒にあって人生を取り戻す。そんな気概に満ちあふれています。

農作業は土や雨にまみれる。革靴での営業回りにこだわるサラリーマン。ミニスカートにあこがれる年ごろの女性。もちろん、スポーツに本格的に挑戦する人も。

い目標が生まれる。患者がそれを達成できたときの喜びは、そのまま白井さんの喜びなのです。佐藤さんのスピーチには、こんな一節がありました。「そして何より、私にとって大切なのは、私が持っているものであって、私が失ったものではない

障害を共に乗り越える

年のはじめに考える

「病気や障害のない人も、体調

が優れないときはあります。みんなが事前に伝え合っておけば、互いに気を配り合えるし、仕事の能率だって上がるでしょう」

「まさか自分や家族は障害を負うまい」。健常者のそんな想像力の欠如こそが障害への無理解、無関心を招いている面がある。

段差をなくす。点字で表示したり。筆談に依ったり、ゆっくり話転を利かせれば、障害者は優れた才能を開花させるはず。

歴史が異なるとはいえず、なぜいつまでもオリンピックとパラリンピックは別々に行われるのか。

「男子の部」と「女子の部」と同様に「障害者の部」を設け、統合できれば二十一世紀にふさわしい。「平和の祭典」の意味合いもきつと深まるに違いありません。

世界中から大観衆が来日したとき、障害を越えて支え合う成熟社会の見本を披露したいものです。